

光のヤオ

光明聖歌集

目次

一三	禮	一	九	一心十界の願	一四
二二	光佛禮讚	一	一〇	佛々相念の讚	一六
三	聖きみくに	二	一一	禮拜の範	一八
四	念佛七覺支	四	一二	不死の忠魂	一九
五	法身の讚	六	一三	をみなな模	二〇
六	報身の讚	八	一四	朝日のいのり	二二
七	應身の讚	一〇	一五	感謝の歌(Ⅱ)	二四
八	如來の光	二二	一六	如來光明讚及光明歎徳	二六
一七	聖意の現れ	二八	二五	光顔巍巍々讚	三六
	以上は聖者道跡に聖者所撰の贈		二六	聖き皇統	三七
一八	のりのいと	中井平三 耶作曲	二九		
一九	月影及び日に新	四光大師及聖者道跡作	三〇		
二〇	露の身及び暫し又	長妻完至作曲	三二	御じひのうた	三八
二一	育兒の歌	上良 道作曲	三二	大みお	四〇
二二	いのちの葉	上良 道作曲	三三	辨祭上人禮讚歌	四一
二三	感謝の歌	上良 道作曲	三四	辨祭上人哀悼曲	四三
二四	如來讚	上良 道作曲	三五	ねがひ	四四

附録

以上は聖者道跡に御滅後附曲のもの

三 禮

(= 調 四 拍 子)

な う - あ み - だ - よ

十二 光 佛 禮 讚

(= 調 四 拍 子)

な う - あ み - だ - よ

ほんね ほつしん あみだそん
ほんねく よになる れい たい の

あをを じゅうに たれましし
ひれう じゅうに きせうせん

聖き啓示を被むりて
清きみ天は朗らかに
雲に聳ゆる高樓は
瑠璃寶石の莊嚴の
七の寶の池見れば
金の沙はさらやかに
寶の樹に玉の枝
みそのに遊ぶ樂みは
天つ乙女は雲を分け
ひよける音の樂しさは

三摩耶の窓に開くれば
常世のみ國現はれぬ
金銀まに眞珠
照り輝くこと窮みなく
八の功德の水みたり
清める面にぞ照り徹る
金の花は咲にはふ
無爲の都の春ながし
奏するしらべ妙にして
身のをき處も覺はえじ

口々に六度の花の雨
きしの山吹宛がらに
三昧の筵に座を占て
烏瑟の縁は天にこい
金の相好妙にして
巍巍威儀は嚴そかに
菩薩は妙なる法の身に
如來を繞りし裝ひは
無爲泥洹の境には
大悲心に薰じてぞ

金の庭にぞふりつる
何の色ぞとまがふらめ
仰ぎ奉つれば彌陀尊
五山の毫光かやける
月のみ顔は間かなり
萬の徳は満みたり
おのゝ威徳備はりて
雲の月をかこむ如と
長閑さ有無を離れにき
分身利物の極なげむ

きよきみに

(= 調 四 拍 子)

きよきみに

まやのまごしひらくれば

きよきみにそらはははがらかに

聖きみに

(= 調 四 拍 子)

きよきみに

まやのまごしひらくれば

念佛七覺支

(ハ長調四拍子)

1 1 3 2 2 2 1 2 2 3 3 5 - 0
 1 1 1 3 2 2 2 1 2 2 3 3 5 - 0
 6 6 6 5 1 1 6 6 5 5 5 3 2 - 0
 6 6 6 5 1 1 6 6 5 5 5 3 2 - 0
 1 1 1 1 2 2 5 5 3 3 5 5 6 - 0
 1 1 1 1 2 2 5 5 3 3 5 5 6 - 0
 1 1 1 1 2 2 5 5 3 3 5 5 6 - 0
 1 1 1 1 2 2 5 5 3 3 5 5 6 - 0

念佛七覺支

(一) 擇法覺支

彌陀の身色紫金にて
 圓光徹照したまへる
 端正無比の相好を
 聖名を通して念はへよ
 總ての雜念亂想をば
 排きて一向如來に
 神を選して念すれば
 便はち三昧成すべし

(五) 定覺支

彌陀に心をうつせみの
 三昧正受に入りぬれば
 慈悲のみ顔を視まつれば
 入我我入の靈感に
 絶對無限の光明の
 此處に居ながら宛がらに
 夜なく佛と共に寝ね
 立居起臥添よまして

(七) 念覺支

もぬけ果たる聲きよく
 神氣融液不思議なり
 盡ての障礙も除こりぬ
 聖き心よみがへる
 中に安住するとき
 神は淨土に栖み遊ぶ
 朝なくも共に起き
 須臾も離ることぞなき

(二) 精進覺支
 聲々御名を稱へては
 身心彌陀を稱念し
 金剛石も磨きなば
 三摩耶に神を凝しなば

(三) 喜覺支
 偏へに佛を見まほしく
 身命惜まず念すれば
 念々佛を念じなば
 靈きめぐみに融合うて

(四) 轉安覺支
 御名に精神はさそはれて
 三昧純熟する時は
 我等が業障ふかき身も
 身心あるを覺はえて

慈悲の光を仰ぐべし
 勇猛に觸み勉めかし
 日光反映するが如と
 彌陀の光は輝かん
 愛慕の情いと深く
 即ち彌陀は現はれん
 慈悲の光にもよほされ
 歡喜極なく覺はゆれ

心念益々至微に入り
 清明にして不思議なり
 慈悲の聖意に融あうて
 定中安きを感すなれ

聖灌に染みし我心
 聖旨の光に靈化せば
 聖旨を意とするときは
 みな佛心とふさはしく

秋の梢のたぐひかも
 光榮現す身とぞなる
 八億四千の念々も
 佛子の徳はそなはるれ

法身の讚

(ハ調四拍子)

1 1 3 2 2 2 1 2 2 3 3 5 - 0
 1 1 1 3 2 2 2 1 2 2 3 3 5 - 0
 6 6 6 5 1 1 6 6 5 5 5 3 2 - 0
 6 6 6 5 1 1 6 6 5 5 5 3 2 - 0
 1 1 1 1 2 2 5 5 3 3 5 5 6 - 0
 1 1 1 1 2 2 5 5 3 3 5 5 6 - 0
 1 1 1 1 2 2 5 5 3 3 5 5 6 - 0
 1 1 1 1 2 2 5 5 3 3 5 5 6 - 0

法身の讚

(一)

仰ぐも畏き阿彌陀尊
 摩訶毘盧遮那と號ては
 六大無礙なる靈體は
 遍なく時空に亘りては
 世々のあらゆる諸佛と
 乃し生とし活く物の
 されは一切の諸佛も
 如來不思議の靈徳を
 三身一如の法の身は
 一切の本初に在ませり
 萬徳法爾とそなはりて
 永恒に自づと在ませり
 天地よろづの神祇と
 大御親にて最と尊し
 有ゆる三世の聖等も
 威な悉く讃めまつる

(二)

毘盧は宇宙の王に在し
 一切萬法の則として
 天地萬ろづの物をみな
 統攝ますなり畏こくも
 一切て智慧と能との
 秩序正しく爲しますも
 即ち因果の律として
 世界の衆生を生成せり
 数へず星のめぐれるも
 地に生しげる草も木も
 天則に係らぬ物ぞなき
 朝日眩ゆくかややくも
 冴やかに照らす月の影
 射通る星のひかりをも
 法身の光榮を現はせり

(三)

三界はすべて我が有ぞ
 即ち我子とのたまへる
 天地萬づのものをもて
 われら衆生を恵みます
 明きひかりに新らしき
 われらが命を賜ひます
 我等は法身に受にける
 攝化のひかり被むりて
 生とし活ける物はみな
 佛は我等が父なり
 愆くは至大に設備ては
 聖旨の程ぞたふとけれ
 精と清けき澎氣もて
 ミオヤの恩寵いと深し
 靈性本自具れば
 聖旨に契ふ子とならん

報身の讚

(變ホ調四拍子)



恩寵のひかりを蒙りて
光に遇はば罪も消え
身心ともに安らげく
信心真に得る人は
聖旨に契ふ子となれば
いよゝ命の終りには
慈悲の面影観まつりて

便はち信心なりぬべし
歡喜はなく覺はえて
清きこゝみに蘇がへる
有漏の依身を變らねど
法子の天職を務むなり
一切の障礙盡きはて
聖き御もとに到るなり

寶の池には水澄みて
七重のうゑきに網覆ひ
寶の蓮華は地に満ちて
ひかりに化佛現はれて
阿彌陀無量光王尊
相好圓滿したまひて
無數の菩薩は法の身に
如來を繞りし装ひは
世尊大衆のなかにして
清風寶樹を吹きぬれば
あまつ乙女は雲を分け
妙なる花をあめふらし

金の砂は照り徹ふる
花と果はかゞやけり
無量の色にひかりあり
微妙の法を説きたまふ
身色金山王の如と
威神のひかり極みなし
智慧と功德と備はりて
雲の月をかこむごと
妙法を説きて已るとき
百千の樂を作すがごと
天の伎樂をならしては
佛と大衆にちらずなり

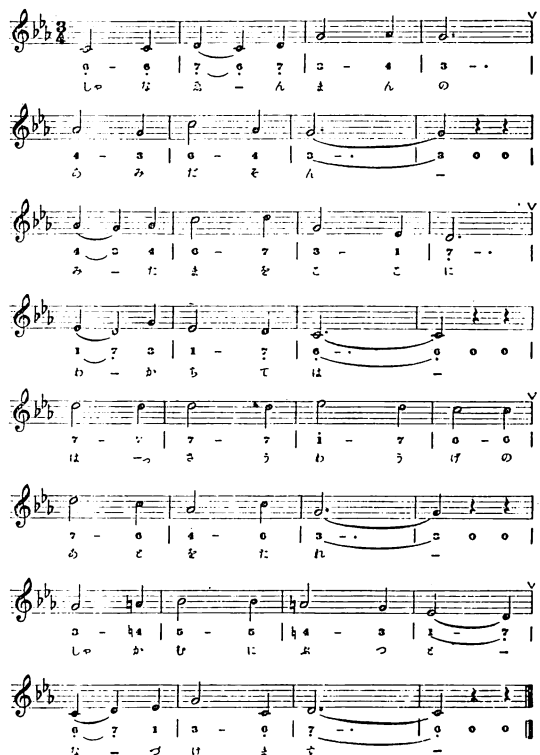
報身の讚

本有法身阿彌陀尊
本覺真如のみやこより
一子の慈悲の割なくも
何成る苦毒を受るとも
無量の願行成就して
本迹不二なる靈體を
無量光土にましまして
世界を照して念佛の
衆生至心に信樂し

無明に迷ふ子らがため
法藏菩薩の迹を垂れ
苦海の衆生を救はん
忍んでつひに悔じとの
即ち十劫覺と現り給ふ
無碍光王と名づくなり
光明遍ねく十方の
衆生を攝取したまへり
佛の慈悲を念すれば

應身の讚

(變ホ調三拍子)



一 二 三 四 五 六 七 八 九 十

舍那圓備の阿彌陀尊
先づ出初めは雲居なる
天地よろづの民草に
地に出てはカピラエの
時を運みてたまひを
うづき八日の長閑さに
降誕す聖子の初聲は
一切の善事遂ぐるてふ
圓かにそなる相好は
學の園生にのぞみては
技藝の林にあそびては
四門の遊びに仇し世の
天の下を統治めす
人の倫として妹と背の
最と塵まじき閑の門に
上なき道の得ま欲しく
乾陁馬王に御されては
深山の雲を分け入りて
みづから鬚髪を除ては

應身の讚
靈を忍上にわかれては
釋迦牟尼佛と號けます
兜率内の宮府には
めぐみの露を湛ほしぬ
淨飯王を父とほし
摩耶の胎に降します
ラビの園生の花のもと
天和地に響きしと
悉達多君とは名けらる
梵仙阿私陀を感かし
五明四吠陀の花をめで
奥義の室に入るとかや
常なき相をことりては
上なき位も避けたまひ
契り染ける耶輸陀羅と
王子の羅睺羅を興かど
きさらぎ八日の曉に
ひそかに宮を出ましぬ
たまの筋をぬぎすてつ
法の衣に替へたまふ

千里の霞を踏みはばり
解脫の道を探ひしかど
尼連禰河のほとりなる
具に苦行を積りては
このねの流に浴みては
飲ぐる乳を受けまして
伽耶の毘鉢羅の樹下
むすぶ伽耶いかめしく
天つ麻羅が吹きおこす
青天深かに照りわたる
月天の死のゆめさめて
無明生れ死のゆめさめて
佛のおしへは正覺の
世を度ふこと五十年に
應化の迹は狗那なる
まこととは久遠實成の
常恒に樂しき御國にて
願はくは我が同胞よ
聖旨に仕ふ身と爲りて

アラ、ウドラの仙人に
意を得まきて立ち去ぬ
緑の草しくそのふらに
六度の春を經にけらし
氣力の女ナグバラが
傾に氣力をよみかへし
金剛座のこけむしう
三味の床に曳きしめぬ
百のいかつちむら雲も
月には障りあらざりし
明尾尾瓜かに出しとき
無上正覺を得たまへり
無量の光をさとらしめ
無量壽國にかへるなり
三輪まどかの籠を垂れ
鶴の林にかくれしせば
光明攝佛にまじしせば
恩寵のひかりに更生り
安き御許にいらなむ

神聖と正義は嚴そかに
 恩寵の母の靈育みには
 本覺の宮に入りぬれば
 無上覺王の寶座には
 聖旨にそむける迷子が
 つみの薪木を積れるも
 塵にまびれし稚な子が
 清き光りのみそぎに
 天うららかに歡びの
 消遙こころの樂しさに

際める父の威儀たかく
 世嗣の聖子と成ぬらむ
 絶對圓滿へだてなく
 威神の光まどかなり
 感と笑となやみなる
 炎のひかりに焚つきぬ
 肉我の感覺は汚るれど
 五根淨とは成りぬべし
 光りはれたるみ園にて
 ときは春は鳥閑なり

さとき光に無明はれて
 月の聖容をままつらば
 漸へぬ光に動機がされ
 ますく至善に向上ては
 永夜に眠れる迷ひ子が
 難思の光りを感じるにぞ
 聖なる靈應に交感とき
 歡喜きはなく覺はえて
 智慧の日月の照らす下
 犠牲まつりし此身もて

智見の眼ひらくとき
 聖きみむねを悟らるれ
 己を消め他をさそひ
 み子の天職を果すなり
 召喚のみこゑに驚きて
 靈のあけとは成ぬべし
 神祕融合いとたへに
 聖きこころに更生へる
 み子の數なる我われは
 聖意に事へまつるなり

おのれ慢ぶり他を感し
 天を畏れず世をなみし
 仁義禮智のみらありて
 義務は國家の爲にとて
 博く愛して人類の爲め
 世に幸福を興ふるは
 小聖は四諦の理を觀じ
 神通おのづと具はりて
 獨り靜に座を占めて
 無明生死の夢さめて
 ばさつは誓の海ふかく

偽善偽徳に名を街ひ
 驕る阿修羅の面にくし
 社交は互に怨ひやり
 力を竭すは人なれや
 我を犠牲に獻げてぞ
 國つ神かや天人か
 無我は宇宙を身と爲は
 無爲の都に栖みあそぶ
 因縁無生の理をさとり
 縁覺涅槃に入りぬらめ
 菩提を求め衆生を度し

一切衆生を我身とす
 佛陀は三身まどかにて
 智慧あまねく照しては
 無明は六のやみぢなり
 九界にかゝる雲はれて
 佛法を外な求めそよ
 宇宙一大真我なる
 如來の智光に無明覺て
 事相は内容かぎりなき
 斯る真理を得てよりは
 最終真理の目的に

同體大悲の極みなし
 法身在さぬ所もなく
 八相應化のあと高し
 覺醒れば一如の天清く
 本覺如來の日は明けし
 己がこころの源の
 無量光壽に歸命せば
 天真自性は顯るれ
 萬の功德は與へらる
 大我の中の我として
 參り天職を力めかし

如來の光

(ニ調四拍子)

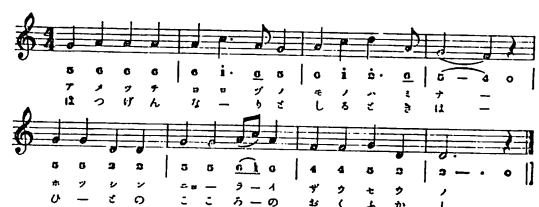


如來の光
 仰ぐも畏こきあみだ尊
 乃し生とし活くものゝ
 如來は法則の主に在て
 一切諸法の原則なれば
 本願攝取ぬの夕日かけ
 幸福と光榮に輝やける
 無量壽如來の法の身は
 聖旨の光を體得ひとは
 四智圓かなる朝日かけ
 ひかりを被る撫し子の
 一切の佛と神がみと
 大み本地にて獨尊とし
 天地萬物を統へ攝さめ
 權能に係らぬ物ぞなき
 歸依かたを照らしては
 涅槃のみ國に引接きぬ
 眞理の父にましませば
 無上法王位を輔處なり
 法の庭にてりわたり
 菩提の花は開きそめむ

如來の光

一心十界の頌

(ハ調四拍子)



一心十界の頌
 天地よろづの物はみな
 發現なりと識るときは
 たとへば巧な畫き師が
 六凡四聖とかはれども
 地獄は倒に懸りてぞ
 人道に逆ひ理に戻り
 有財無財の餓鬼てふは
 たからと五慾を食りて
 形は人類に似たれども
 正なる人道を極さまに
 法身如來藏性の
 人の心性根底ぞ深し
 さまゝ姿を繪すこと
 一つ心や造るなれ
 たけき炎にやかるゝは
 殘酷非道の報ひとや
 肉慾我慾の弊惡症にて
 重き罪惡造るなり
 情操は禽かは獸かは
 歩行衛はいづこそや

佛々相念の讚

(變ハ調四拍子)



佛々相念の讚

(一)

本有常住法身の
無量光王大日輪
威神の光明永しへに
十方世界を照しては
無明に迷ふ子等が爲
方便不思議の力より
釋迦牟尼佛と現れて
如來の慈悲を示します
譬へば西に日は入るも
光は月にうつること
無量壽王の日光は
牟尼満月に輝けり
釋尊出世の本懷を
靈鷲の嘉會に示さんと
即ち世尊は寂靜に
彌陀三昧に入り給ふ
本佛彌陀の靈光は
人佛牟尼に映りひて

爾時諸根悦豫し
光き顔は巍巍として
影が表裏に暢ること

姿色も殊に清らけし
譬へば明淨なる鏡
威容の光極みなし

(二)

如來清淨光明は
諸根はいとも清らけく
如來歡喜の光明は
諸佛の常に住みませる
如來智慧の光明は
世間の闇を照しては

世尊の感數に映らへば
奇特なること極みなし
世雄の聖情に融合し
大我の中に安住す
世眼の智慧と現れて
如實に衆生を導きぬ
如來不斷の光明は
至高徳に在まして
如來萬徳備はりて
三輪完全の鑑とし
人佛牟尼は一向に
本佛彌陀の靈徳は
入我々入は神秘にて
甚深不思議の感應は
願くば我同胞と
念佛三昧をむねとして
光の中に生活さなん

不死の忠魂

(變ハ調四拍子)



一 あゝ忠臣と後の世に
今尚つきぬ橋の
信仰ふかき母が
拜し夢見てやどりしに
二 朝臣は三徳兼備へ
君に献げし命をば
一度死して七度ば
御りまつらむ忠魂は
三 君に倣ひてわれは
至誠の魂とこしへに
四 神とまつらる菅原の
いまは時の示しなる
重き病にかされて
大慈の力に救はれし
こゝろこもれる遺言を
つねに恭敬したまへり
五百の僧に供養なし
種々の功徳を積りけり
みたまにませば今も尚
伏し拜むなり諸人が

不死の忠魂

禮拜の範

(變ハ調二拍子)



一 仰ぎぬがつく太宰府の
道賢公は母がみの
汝が五のとしのをり
危きいのちを觀音の
御恩の程な忘れそと
終身むねにをさめては
三世諸佛を拜禮し
または聖經寫すなど
斯くも信仰ふかゝりし
尊とき神とあがめては

禮拜の範

おみなの模

(ハ 調 四 拍 子)

いとも畏き皇の
 代々の國母の慈悲の露
 自ら誓ひて千人の
 清き心の兆として
 病者を洗ふ浴室に
 阿閃如來を感見す

いとも畏き皇の
 代々の國母の慈悲の露
 自ら誓ひて千人の
 清き心の兆として
 病者を洗ふ浴室に
 阿閃如來を感見す

おみなの模

一 ひとりと古今に英ににし
 慈悲の権化と崇めらる
 末の世までも照すなり

二 聖武の帝を助けては
 悲田施藥の院を立て
 大佛殿をはじめとし
 深くも佛法興隆に

三 公私の二徳を布きとて
 天下の無情を感みぬ
 佛堂伽藍を建立し
 力を竭し給ひけり

四 貴き賤きおしなべて
 かくあれかしと賢くも
 (くりかへし)
 慈悲の姿と現れぬ
 佛を信する女等は
 籠を垂れさせ給ふなり

朝日のいのり

(ハ 調 四 拍 子)

名將毛利元就が
 三人の子息に御示しに
 大かた忘しことぞなき
 斯るたふとき大事をば

我十一のとしのとき
 大方どのに作ひて
 汝等三人つとめては
 尙又人にもわかつてよと

知識のもとに詣ては
 念佛の大事を受にける
 深きまことを傳へらる
 さすがは武威輝きし

朝日に向ひて十度づつ
 南無阿彌陀佛を唱れば
 南無阿彌陀佛の良將が
 心の奥ぞ床しけれ

後生は必ず極樂に
 此世の祈禱も之なりと
 言を若き子女によす
 信仰なきは人ならず

さづかりにける朝より
 七十餘歳の夕まで
 かくる賢きみあををば
 倣ふて則となされかし

朝日のいのり

一 名將毛利元就が
 三人の子息に御示しに
 大かた忘しことぞなき
 斯るたふとき大事をば

二 我十一のとしのとき
 大方どのに作ひて
 汝等三人つとめては
 尙又人にもわかつてよと

三 知識のもとに詣ては
 念佛の大事を受にける
 深きまことを傳へらる
 さすがは武威輝きし

四 朝日に向ひて十度づつ
 南無阿彌陀佛を唱れば
 南無阿彌陀佛の良將が
 心の奥ぞ床しけれ

五 後生は必ず極樂に
 此世の祈禱も之なりと
 言を若き子女によす
 信仰なきは人ならず

六 さづかりにける朝より
 七十餘歳の夕まで
 かくる賢きみあををば
 倣ふて則となされかし

三 萬のものを慈愛み
 神聖正義を示します
 罪と惱の我等には
 感謝こころを常とはし
 天命の職をばげめかし

二 眞天の則は意識なき
 況て意識のある身より
 仰げば彌々たふとしな
 もはやこの身は限なき
 壽の中の生命ぞと

一 ものは言はぬに天地の
 春はめばえて夏茂り
 秋は實りて冬藏む
 救ひの聖手に攝められ
 聖き光に潔よく

四 慈愛を聖名に表せり
 崇めて聖旨に歸命はく

五 常恒のどげき心地して
 平和ぞ此世を生活るれ

六 歎び勇みて日々々に
 聖き意をかしこみて

如來光明讚

無量壽佛威神光明最尊第一諸佛光明
 所不能及是故亦號無量壽佛無量光佛
 無邊光佛無碍光佛智慧光佛不礙光佛
 清淨光佛歡喜光佛稱光佛超日月光佛
 難思光佛者三垢消滅身意柔順歡喜踊
 過斯光若無復苦惱壽終之後皆蒙解脫
 善心生焉若無復苦惱壽終之後皆蒙解脫
 皆得休息無不聞我今稱其功德神功
 無量壽佛不聞諸苦隨所共歎我今稱
 莫不聞諸苦隨所共歎我今稱其功德神
 聲聞衆生聞其功德神功其功德神功
 若有衆生聞其功德神功其功德神功
 至心聞佛道時佛言我今稱其功德神
 亦如殊妙晝夜劫向未盡至心歸命

光明歎德章を調讃する時は十二光佛を前の讃にて稱揚し「無量壽如來光明顯赫」より「亦復如是」迄を後の讃にて歎ひ余は當の如く調讃し奉るべし

竹田竹意附曲

感謝の歌 (II)

(ハ調 四拍子)

1 1 2 2 | 3 3 4 4 | 5 5 4 3 | 2 - - 0 |
 も - の は い は ぬ に あ め つ ち の

1 1 2 2 | 3 3 4 4 | 5 5 4 3 | 2 - - 0 |
 よ と き は つ - ね に あ や ま た す

3 3 4 4 | 5 5 4 3 | 2 2 3 3 | 4 - - 0 |
 は - る は め ば え て な つ し げ り - -

3 3 4 4 | 5 5 4 3 | 2 2 3 3 | 4 - - 0 |
 あ - き は み の り て よ 仰 ぎ ぶ し

如來光明讚

(ハ調 四拍子)

2 2 3 3 | 4 4 3 - | 6 6 4 4 | 2 . 3 3 0 |
 無 量 壽 佛 威 神 光 明

7 7 2 2 | 7 7 2 2 | 6 6 4 4 | 2 . 3 3 0 |
 最 尊 第 一 諸 佛 光 明

光明歎德

(ハ調 四拍子)

6 - 7 - | 1 2 3 4 | 1 7 2 4 | 3 - - 0 |
 し - りょうじゆ - にょらいの
 こゝろ - - - な - - - し

3 3 3 6 | 4 . 4 3 3 | 3 2 1 7 | 0 - - 0 |
 かうめうけんかくに - し て
 くだわれいませのかうめうを

6 - 6 1 | 7 0 4 3 | 7 1 7 9 | 3 - - 0 |
 し - つ ほろ - を やうこう
 せうするの - み に あ - り

1 1 7 4 | 3 . 3 3 1 | 7 3 1 7 | 0 - - 0 |
 しょつこのくにきこふ
 い - つ き - い の しょ - ぶ - つ

のりのいと

(ニ調六拍子變)

親しみを以て

あみだほとけののりのいと
 こころのたまに つらぬきて
 みなもろどもにのちのよは

のりのいと

一 あみだほとけの法の糸
 心の玉につらぬきて
 若もろともに後の世は
 同じ蓮の身とならば
 此露の身はこゝかしこ
 しばしが程は別るとも
 心は珠数の緒を通し
 同じ悟りの身とならむ
 のちこの經を讀む人は
 思ひ出すらん華の上に
 半を契りし此友を
 深き誠の友として
 清きみのりの糸口を
 心にとほせ親も子も
 また兄弟も友達も
 このひとすぢの法の糸
 共にこゝろに貫きて
 同く無爲の身とならば
 同く無爲の身とならば
 親子夫婦も兄弟も
 六親眷族友達も
 一の法の糸とほし
 同く無爲の身とならむ
 南無阿彌陀佛あみだ佛
 南無阿彌陀佛あみだ佛

聖意の現はれ

(ニ調四拍子)

せいなるみなを たたへては
 みじねのあらはれあふぐなり

聖意の現はれ

聖なる聖名を稱へては
 聖意の現はれ仰ぐなり
 如來の無上恩寵を
 我らが感情に満しめよ
 如來の神聖なる聖意
 我らが良心を照しませ
 如來の正義なる聖意
 我らが意志に現はれよ
 至真にしていと聖き
 靈國をこゝに格れかし
 至善にしていと聖き
 靈國をこゝに格れかし
 至美にしていと聖き
 靈國をこゝに格れかし
 我をすべての同胞と
 安き靈許に在らしめよ

露の身

(變口長調四拍子)

つゆのみはこゝかしこにてき
 ゆるともこゝろはむなじ
 な の い て な

露の身

一 露の身はこゝかしこにて
 消るとも
 心はおなじ花のうてなぞ
 (法然上人)
 二 しばしまだ別るゝもの
 やがてゆく
 西のみやこにあふ日をぞまづ
 (辨榮上人)

月影の歌

(ハ調四拍子)

1. つきかげのいたるのさ
 2. ひにあらたひにあらたに
 なけれともながむるひ
 ありためんひよるひかりに
 こころにぞすむ
 てらさるる身は

月影の歌

一 月影のいたらぬ里は
 なけれども
 ながむる人の
 心にぞすむ
 (法然上人)
 二 日にあらた日々にあらたに
 たへぬ光に
 改めん
 てらさるゝ身は
 (辨榮上人)

いのちの葉

(嬰へ短調六拍子)

6-6 7- i- 7-6-6 #5-6 7-i 7- 7-0
よはの あらしの はげしきに -

3-3 i-7 6-6 i- 7-7 i-i 6- 6-0
ふしたる くさし いろかへて -

4-3 6-3 i-i 6- 7-7 i-i 7- 7-0
ときしも ふける あきか-ぜの -

3-3 3-3 6-7 1- 4-4 3-3 6- 6-0
からまた のこす のべもなし -

四 三 二 一

我身千歳とたのみしに
月さへ西にかたむけり
たれもかたむけ彼國に

我身もいつか秋風に
花も緑の千ぐさをも

もみちも共に吹き落す
あなかなしかる秋風の

夜半の風のはげしきに
時しも吹ける秋風の

ふしたる草も色かへて
枯さで残す野邊もなし

草のみどりも紅の
落てはへだつる色も

散ぬ枯ぬと聞くからは
ちりぬるものぞ命の葉

いつまでここに有明の
たれもかたむけ彼國に

いのちの葉

育児の歌

(ハ調四拍子)

3 3 3 3 4 4 3 4 6 7 6 4 6 3- 0
お・くも かしこき みお-やより

3. 3 4 3 2. 4 3- 1 6 7. 3 3- 0
あづかりにける ちごなれば

6. 6 4 3 i i 7 6 7. 7 7 i 7- 0
みむねのこ-ろになれかしこ

i. i 7 6 4. 3 6- 1 3 4. 3 3- 0
ただあさゆふに いのちなり

二 一

われしもみむねに
地獄の薪なれ

あづかりにける
この稚兒を

神聖正義のミオヤより

ただ旦夕にいのちなり

みまかしの兒等に
なれかしこ

預かりにける
稚兒なれば

仰ぐも畏れなき
親より

育児の歌

如來讚

(ニ調四拍子)

7-1 7 6. 7 1 1 7 3. 4 3- 0
みだのみいづはきはみなく

4 4 6 4 3. 4 3 3 4 3 1. 6 7- 0
ひ-かりかむらぬしのはなし

6 6 6 7 1. 1 7 6 4 4 6. 4 3- 0
みよからひ-そりたぐれし

2 2 3 4 6. 4 3 1 3 3 1. 7 6- 0
あふゆるほ-とけほめまつ

六 五 四 三 二 一

われらこのみやみふかく
すくひのみなとなれば

むねのみやこいたるには
くるしきうかじづめるは

たとへこのまをはるまで
みだふかしのみさかえは

あみだほとけのみひかりは
みなとなふるひとはみな

つねにこころにたえせねば
みだのみいづのみひかりと

みだのみいづはきはみなく
みちからひとりすぐれしと

ひかりかむらぬものはなし
あふゆるほとけほめまつ

そのみさかえをほめまつり
きよきみくににやまるべし

てらさねとこゝろなりけり
をさめてすてじときたまふ

こころのまことのはに
とくともしきじとのたまへり

こころのやみかきにぞ
あみだほとけなだむべし

はてしもしらでまよひぬ
ほとけよわれなすけませ

如來讚

感謝の歌

(ニ長調六拍子)

5 5 6. 5 3 1 6 5 5 2 3 2. 2 0
てんはなにせしいはれせし-

4 4 2 2 7 6 5 4 3 5 4 2 1. 1 0
よきはつ-ねを あやまら-

2 3. 2 6 2 3 2 5 1 3 2 1 5. 5 0
に-るはめはへてなつしげり-

i. i 6 5 3 1 6 5 5 2 1 1. 1 0
あきけのりてふおまじ-

六 五 四 三 二 一

常に感謝の心もて
悦び勇みて日々日に

もはや此身は終りなき
常恒に開けき心地して

救ひの御手に攝められ
恩寵を御名に表はせり

神聖正義をしめします
萬の物をいつくしみ

大親のおきては意なき
まして心の有る身より

天は何ともいはねども
春は非生へて夏しげり

四時は常を過まらず
秋は實りて冬收む

草木も守りて違はじを
仰げば彌よ尊としな

心を照らす靈光は
罪にほろびし我等には

稱へて聖意を信頼なば
光の裡に潔きよく

安くぞ此世を暮さるる
壽の中の生命ぞと

聖きみむねを畏こみて
命せの職をばげまなん

感謝の歌

聖き皇統

(變ハ長調四拍子)

Musical notation for '聖き皇統' with four staves and corresponding Japanese lyrics.

五 四 三 二 一

朝日かきやく日の本の... 吾皇の代々ばかり

聖き皇統

一 なさけにもゆる親ごころ... 六 子を喚ぶ大悲のおん聲が

御じひの頌

(一)

(二)

光顔巍々讚

(ハ長調四拍子)

Musical notation for '光顔巍々讚' with four staves and corresponding Japanese lyrics.

五 四 三 二 一

萬の山に立ちこえて... 光顔だかく輝けり

光顔巍々讚

おじひの頌

(變ハ調三拍子)

Musical notation for 'おじひの頌' with six staves and corresponding Japanese lyrics.

辨榮上人禮讃歌

(ハ 調 四拍子)

3. 3 3 3 4. 4 3- 2. 2 4 4 3-0
ひかりのをしへ たれましし

6. 6 3 3 1. 1 6- 7. 7 7 7 7-0
ひじりはつゆと きえましわ

1- 6. 6 4. 3 2 2 1. 1 2 2 3-0
みよきよきくに はすのうへ

6. 7 1 1 2. 3 4- 6. 6 6 6 6-0
てりかがやける みすがたを

光ひかりの教を垂たれましし
聖者は露つゆと消きえましぬ
見よ聖ひき國くに蓮はの上うへ
照てり輝かがける御姿みすがたを

辨榮上人禮讃歌

— 良 武 歌 讚 —

大みおや

(變ロ調 四拍子)

3-4 3 1 7 6 7 1 3 1 7 1 6-0
： 5 を う れ - え の じ れ や せ て

4. 4 4 3 7. 6 4 3 4 3 2. 2 3-0
な み だ に あ - つ や た ら ち ね の

1- 1 1 1 7 6 7 3 1 7. 6 7-0
お か き な ら げ の あ ふ れ よ り

6. 1 7 6 4 4 3 3 4 3 2. 2 3-0
み な よ ぶ ち か ひ と な り に け る

四 三 二 一

罪つみのいましめ解とれさとし
慈じ悲ひの吽うんといとしげに
誠まことこめたる呼よぶ聲こゑを
父ちちを呼よびては伏たまろび
おはれ御子みこはも幾いく千せん歳さい
ひしとからめる苦くるしみさに
六むの巷ちやうにすすり泣なく
己おのがつくりし罪つみとがの
御名みなよぶ誓ちかと成なりにける
深こきなさけの溢あふれより
子こ等を愁うれへの胸むねやせて
涙なみだにまつやたらちねの
— 夏山歌讚 —

母ははを呼よびては血ちの涙なみだ
待まちちわび給たまふみ佛ほとけは
惱なやみの子こ等を抱いだきとり
永とこ遠とほのみ國くにに育そだてます

落葉おち散ちり敷しく
薄霧うす未なだ
野末のの涯はには
風吹かぜく
無上むじやう無二むになる
師走ししやう四日よっぴの
初冬はつふゆの朝あた
四邊よっぺんを籠かごめ
開消ひらきえ失うせすに
悲かなしみの日ひ
我師わがしは逝ゆきたり
曉空あけぞら

北國きたくに雪降ゆきふる
み 柩こゝろ
時ときに先立まちて
雪蔽ゆきおほはむ
雪ゆきに埋うみて
涙なみだの
人の胸むねの血ちは
冷ひやたく冷ひやえむに
悲かな哀あはれの曲うた
氷こりはてよ
み骸みくわう失うせはてぬ
— 良 武 歌 讚 —

辨榮上人哀悼曲

— 平 三 耶 歌 讚 —

哀悼曲

(變ロ調 三拍子)

静かに息いきしみを以もて
おとむりしなる
はつがゆはあきしたり
うすはすやいづまかの
あたるをきこそめら
おのきよにほる
うせむに
おのきよにほる

聖きみに (高崎市所傳)

(ハ 調 四 拍 子)

7 7 1 7 6 3 1 1 | 1 2 2 9 9 7 | 7 7 1 7 6 3 1 1 | 3 - - - |
 き - ー - き - し - め - し - を か - ひ - り て

4 4 4 3 3 2 | 2 9 9 3 - | 3 3 4 3 3 2 | 3 - - - |
 さ ま や - の - ま - ぞ - し ひ ら - - く れ ば

7 7 1 7 6 3 1 1 | 1 2 2 9 9 7 | 7 7 1 7 6 3 1 1 | 3 . 1 7 - |
 き - ー - き - み - と - ら - は は - ら か に - -

4 4 4 3 3 2 | 2 9 9 3 - | 3 3 4 3 3 2 | 3 - - - |
 と こ ー の - み - く - に あ ら - - は れ ぬ

聖きみに (川上氏修正)

(變 * 調 四 拍 子)

7 1 7 6 3 1 1 | 1 7 6 6 7 1 7 6 7 3 3 - 0
 き - - - き - し め - し な か - ひ - り - て

4 4 4 3 3 2 | 2 7 6 6 4 3 - 3 4 3 2 2 3 3 - 0
 さ ま や - の - ま - ぞ - し ひ ら - - く れ - ば

念佛七覺支 (高崎市所傳)

(ハ 調 四 拍 子)

1 1 1 3 | 2 2 2 1 | 2 2 3 3 | 4 - - 0 |
 み お や の し ん じ き し こ ん に て

o o s s | i i e o | s s s a | 2 - - 0 |
 え ん じ ゅ う て つ し ゅ う し た ま へ る

1 1 1 1 | 2 2 5 5 | 3 3 5 5 | e - - 0 |
 た ん じ ゅ う ひ - ひ の み た が た を

i i 3 2 | 2 2 2 2 | o o o 2 | i - - 0 |
 み - な を と ほ し て お も へ へ よ

i i i i | 2 2 i o | s s s a | 2 - - 0 |
 す べ て の み た る る こ こ ろ を ば

3 3 2 1 | 3 3 5 5 | o o o i | 5 - - 0 |
 ひ ら き て ひ た す ら み ほ と け に

i i i i | e o s s | 3 3 2 3 | 2 - - 0 |
 こ こ ろ を う つ し て ね ん じ ゅ べ

2 2 2 i | o o s a | 3 3 3 2 | 1 - - 0 ||
 す な は ち さ ん ま い じ ゅ う ち べ し

ねがひ

(ト 調 四 拍 子)

可愛い (♩=76)

1 - 1 1 | 9 9 9 9 | 1 2 1 9 1 | 2 - - 0 |
 お て て あ は せ て を が - み ま せ う

お て て あ は せ て を が - み ま せ う

3 3 2 1 | 9 1 9 9 9 | 9 1 1 9 | 1 - - 0 |
 あ か る い み ら - へ と ね が ひ ま せ う

ま こ と の ひ と - に と ね が ひ ま せ う

	二	一	
ま	お	あ	お
こ	て	か	て
と	ゝ	る	ゝ
の	あ	い	あ
ひ	は	み	は
と	せ	ら	せ
と	て	へ	て
に	と	と	に
と	と	と	と
ね	ね	ね	ね
が	が	が	が
ひ	ひ	ひ	ひ
			い
			良
			武
			作
			歌
			一

念佛七覺支

(ト 調 四 拍 子)

1 1 3 3 | 9 9 9 9 | 3 3 2 1 | 2 - - 0 |
 み お や の し ん じ き し こ ん に て

す べ て の み た る る こ こ ろ を ば

1 1 3 3 | 3 3 9 9 | 3 3 2 1 | 2 - - 0 |
 え ん じ ゅ う て つ し ゅ う し た ま へ る

ひ ら き て ひ た す ら み ほ と け に

9 9 9 9 | 9 9 9 9 | 9 9 9 9 | 2 - - 0 |
 た ん じ ゅ う ひ - ひ の み た が た を

こ こ ろ を う つ し て ね ん じ ゅ べ

9 9 9 9 | 9 9 9 9 | 9 9 9 9 | 2 - - 0 |
 み - な を と ほ し て お も へ へ よ

す な は ち さ ん ま い じ ゅ う ち べ し

聖意の現れ (川上氏修正)

(ハ 調 四 拍 子)

2 2 2 2 2 2 2- 3 3 2- 5-2 0
 せいなるみなをたふしては

2 2 2 2 2 2 1 1 2 2 7 6 6- 0
 めむねのあらはれあはぐなり

のりのいと (川上氏修正)

(ハ 長 調 六 拍 子)

3 5 5 3 5 6 6 5 6 1 1 7 6 5 5 3
 あみだほえけののりのいと

5 5 3 5 6 6 5 4 3 3 2 2 1 1 2
 ころのたふにたふきて

2 3 4 4 3 2 3 5 6 1 1 6 5 5 3
 なもろとにのちのよは

5 5 3 5 6 6 5 4 3 3 2 2 1 1
 なごらちのよえな

昭和六年九月二十五日附印刷
 昭和六年九月二十八日附發行
 編輯人 發行者 東京市小石川
 區水道橋二ノ四十四山崎辨成
 印刷人 東京市小石川區小日向
 臺町三ノ四三春山治郎左衛門
 發行所 東京市小石川區水道橋
 二ノ四十四ミヤのひかり社